



にぎわいのあるまちに住み続けたい

高山のまちなかの魅力、それは「400年の歴史からなる通りの文化」と「四季折々の日々の暮らしの文化」といえます。しかし、年間400万人を超える人々が訪れるにぎわいの中でも、まちなかは将来が危惧される状況にあります。市では、魅力ある中心市街地を次代に継承するために、元気を再生するさまざまな取組みを始めました。

飛驒地方の政治・経済の中心

高山市の中心市街地は、近世から現在にわたり飛驒地方の政治、経済、文化、交通の中心としての役割を担ってきました。

また、城下町として、数多くの歴史文化資源が残っており、観光地としての経済活動拠点となっています。

金森氏が築いた高山の町の基礎

高山の町の成り立ちは、戦国大名・金森長近の飛驒入国に始まります。越前大野(福井県大野市)城主であった金森長近が、天正13年(1585年)に豊臣秀吉の命を受

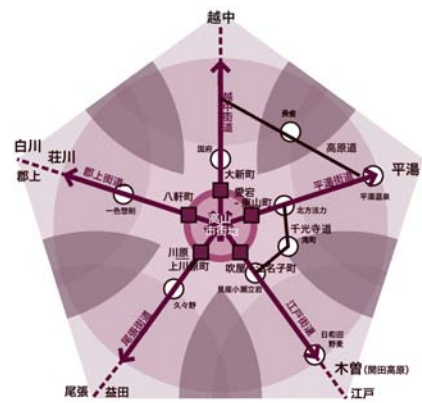
けて三木氏を攻略し、飛驒を平定。翌年飛驒国3万8千石の国主として入国し、居城の建設と城下町の整備を進め、城を囲む高台を武家屋敷、一段低いところを町人の町(現在の「古い町並」とし、東側の山すそには数々の寺社を移築建立しました。

また、城下町の中には東西南北の街道が引き込まれ、飛驒における政治、経済の中心としての機能を持たせていました。こうした金森氏の取組みにより、現在に至る高山の町の基礎ができあがったのです。

元禄5年(1692年)から飛驒は江戸幕府の直轄地となり、高山には代官所(陣屋)が置かれまし。武家屋敷や城郭は石垣に至る



よりとぎ 金森氏六代頼岩の頃の高山の地割



高山の中心部へとつながっている歴史街道